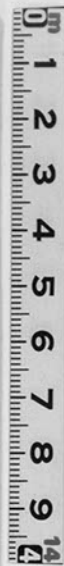


人 表 現

2



表現人

NO. 2.

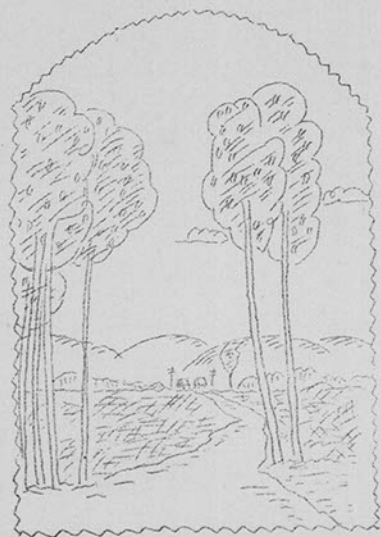


表 理 人

(第二号内容)

○ 過去藝術を清算せよ (評論)

高 瀬 勝 男

詩

● 無
● 山田の鬼索 香 題

● 街

● 北海道行進曲

● 五

● ぼんぼんタリ

● おもたし日

● 青

● 山道の墓

● 敵 旁 日

● 初

夏 記 地 香

○ 若さカ―ペンタ―の家

○ よろこび (故郷の人々へ贈る)

新 佐 馬 高 高 杉 片 楳 横 島 三

要 藤 場 木 橋 本 寄 田 田 野

郁 義 卯 柳 美 純 敗 崎 早 母 混

木 家 郎 江 子 一 二 夫 造 光 汎

短 歌

● 舊 作

● 香 子

● 瓶

其 他

○ 題

● 駒 と 蝶 蛸

● 春 季

● 春 季

● 給

● 春 季

● 春 季

● 春 季

● 春 季

● 春 季

● 春 季

● 春 季

○ 晩 春 (創作)

横 田 早 造

後 記

(印 部)

石 田 修 二

佐 藤 義 家

佐 藤 義 家

矢 高 冬 全

佐 川 満 寿 莊

佐 田 木 修 二

石 田 修 二

南 波 白 修 二

安 藤 幸 岩 眠

織 内 涼 風

馬 場 卯 一

横 田 早 造



過去藝術を清算せよ

高瀬 勝男

過去一切の藝術の清算に進む時が来た。そして私達はつと現実的な實際派の藝術に對してより多くの期待と批判を加へねばならない。封建的貴族主義の経済的過度収束から出奔した現代資本主義があらゆる文化と生産を成育させて限りなき市場擴張をしてゐる時、藝術は貴族主義藝術から資本主義藝術へと改裝した。

私達は理想派の藝術がいつ迄尚懷することないを宜言した。至上美を超越階級的なものにしたのをそして余りに觀念化された藝術をうみ出した。階級を否定し、此れなきを促進した貴族主義の矛盾のなかに階級的擁護として意識的に侵潤しゆく矛盾に考へさせられる。

ロマン派、神秘派、自然主義派等々の各体系的藝術上のイデオロギが不思議な類似通つた精神に、貴族主義を讃美し其の二惑に酔つてゐるのを知り、おかしなことに意識の錯覺を真理の如く辨いてやがて藝術の不覺に形式的範疇をおろした。

社会とはといふことを考へる前に、藝術は雄大な美學建設であると断定する。藝術のなかに含まれたる嬉ばしき歡喜を民衆と共にすることなく貴族へと献身した過ちを藝術粗野であり愚昧であり單純であつた封建時代から民衆の働きに重用でない抽象的藝術の企圖が、裁判と裁量とがいふ權力の行使による制度下のものとに強權に同化した神へのおきてとして告知した。

貴族連に對してある。私達は忠實なる裝飾人です。民衆連は藝術に距離があるのです。と、貴族主義から資本主義への代弁を民衆の揶揄と侮蔑においた。斯くして民衆に然々關係のない興奮と情緒と意欲を充てて象牙の塔に籠る貴族をさへ不必要になつた。私達は最早客間的藝術の清算にのぞんでゐる。

奴隷と服従に打ちえた我々は工場からわさへ翻らぬ藝術が生ずる労働者の握手に豪晴らしい男も女も生産の機能を持つる全部が刺激たる喇叭を金也にふきつけてゐるでわないのか、藝術は誰のためかおしけなく胸の彼をうたせて、さあ、兄弟躍らうと呼びかけてゐる。

私達は新らしい藝術に飢ゑることなき、獻智を働かせねばならない。



○ 無 題

三 野 混 純

ぶたれてはれようた
そしてくろなじになりやがった
偏見と反逆で孤兒
陰鬼の上を行く

すべて俺達の空間
俺は飽く迄俺の血を溢びたくはない
俺はつきかかって行がなくてほならぬ
俺自ら氾濫する
生を術を 清浄を 煙を

そして断首台を足蹴にして
つっじの森が俺を受けろ

○ 山間の思索者

島田 丹光

けだるき疲水の足を引かず
松の密林をぬけぬけ——
ふとはぐまに見出せる百坪の沼。

疲水果てたる身を沼畔にかげめば
冷く脊すじを走る神気に身はかたまり
そろそろと鳴る松風に
一入心の透徹するを覚える。

たまごかに宿る沼底の雲も

さかしまの松にはき清められ
神巖を鈍重の青に沈澱する沼は
山間に端座する思索者である
じぶじぶじぶじぶ 水面に浮び上る泡は
幽なる神祕の土の呼吸である。

あ、全山の神霊の気はここに沈澱し
沼は益々冷徹なる 底深き思索を続ける——。

○ 月に浮れて

こんなにも
素直な月の夜だもんだから
水色の光を肩にながらせて

ふところ手して
ふらりふらり何処の果までも
歩み続けたい
——さつとこの倦怠を流す処が
あらうから……

○ 街

目と目と
光り
光り

何んといふ
鮮かな觸感だ

横田 阜造

シヨ——ウキンド——の誘惑が

真晝

真晝の唄

女の腰の圓みか

毒々しい香気を発散させる

十二時頃の

街頭！

○ 北海道行進曲

——古く作中より——

福田 将夫

廣々たる后狩の平野の
常に消ゆるなき如く雪は
砂のやうにきらめくが
光の死んだ空は灰色である

——へたばりついたやうな鉛色の月——

こゝろが雪のやうに立ち籠めた霧の中で
髓をわけ別るものを感じつゝも
寒さにしつかりと三月の生命のふくらみを抱いた
午近のアカシヤの並々も
灰色にほがみれる

遠く少く夢見る從々の幌都の灯も
とりか、氷し雪に美しく反映する

あゝ北海の春——
おとずれのおそく——

○五月

片寄歌二

ほけた春は
季節の死球を喰ってしまった

あゝ新緑

〇うはさへの挑戦

あらぬ飛のうはさをこねた人は
四葉を川下へ流したさりでず

○或る時計

八時に十二時を報ずる時計

で九時には十三時を報じません

○ほんほんダリヤ

そつと

ふしぎな話声かする

蒼白い月を背負った海の子身唄が
霧深くのぼってゆく

松本 純一

なんとこのべのべしい橋に

見れば

ほんととさこれ座った砂っほの

ほんほんダリヤが頸に水を生ける祈り。

○おるたい日だ

しよつとするとね

システリカルな咲笑に

ほつそりするときがあるの

このごろわたし

淋しいくせかついた

高橋美智子

○

華やかに

ぽっかり割れた

夜の火花

あゝあの炸裂がほしい

雨あかりだと云ふに

なんて重たいところだ

○ 小曲 青 春

ひろひろと

高
木
柳
江

野に向ひ

涙をかせり

吾が青春

唯ひろし

君をうしひより

草笛今日も

野にながる

さねど君はえたりす

○ 山道の墓地

馬場 卯一郎

此の山間を通ったことのある旅人の一人であるならば

遠い鬼ひびきに、あるひは新らしい事実として経験されたであらう

旅人は幽かな声に振り返った

山間の路傍の叢の中にはみすばらしい土漫頭の墓があるばかりである

声はたしかにその地底から湧き出ているのだ

旅人は合掌を組んでゐた

自分に先づいた悲しい妻 慈愛深く優しくった

父母 可愛い吾が子も

彼のうるんだ舌腹にはこうした過去のひとびとの姿が静かに浮んでゐた

旅人はいつまでもいつまでも額づいてゐた

山間の路傍の雑草にうづもれ

見る影だにない一塊の墓ではあるが

ここ山道を通る旅人達は

ここちからの合掌をおしまないのだ

あゝこの優しいここちからの呼びかけは

心とさめがすひとひとの靈魂を打たずにおかない

ひとひととよ ひとの世の続く限り

いな、そのあとあとの世の果てまでも

この優しい無言の呼びかけは永遠に絶ゆるときかないのであらう

○ 畝旁日記

佐藤義家

晴……………

土曜のなだらかな

夢徳に

梅があまりに青い

麦の早熟に

狐が身重になつてくる

田圃くまなく

蛙の合戦 友食の繁殖 刈節

五月の暮暮哀に

一夏の昔の夢 雲ばかり

○ 初夏

新妻 郁太郎

どうも吹き過ぐる微風は
ビールの泡

街路樹の新緑

あゝ夏かきたのを

すかし

單衣の曲線

あゝ夏だ夏だ

白いパイルが

まぶしい程輝く

○花園の思ひ

咲き乱れたる

菜の花に

飛び散る蝶の

かわやかさ

甘い甘さ

さやさに

蝶ははばたき
嬉しがる

ひとつ手折って

行きませうか

花瓶にさして

たのしみか

恋するひとに

贈らうか

蝶のとまった

この花を

×

×

×



若きカーペンターの家

松本 純一

平と好同の俯眼を回つて他の一面が赤井嶽の穂やかな腰間に迫つてゐる。
——こゝあたり赫だ、海があるがの砂地だ、どことなく展望すると
開墾地の面影が未だ其の香りを失はない、路のやうな菊茸山に数へで
下りてゐた所に暮島さんの謂ふ「若きカーペンターの家」がある、即
ち三野混純さんの住家である。

丁度梨の花が霽と咲きいどんでゐる頃、五月の空が大きな硝子戸
を張つて太陽のゆらつと燃えてゐるのがよく見える、此温室の甲に三色堇
菜がいくつが素焼の鉢に盛られて童聖女が、ちやんの手でぐるぐる

まわつてゐる。

「この花、めんごいぞい」と話しかける、
赤い頬たぶにひなひな、かな、唇が出る、
黙つてたら

「めんごくねい、はがたなり」と眼便へに睨まれた、それで
も唇は浮んでゐる。

また、かつちやんがしやかみ下ら喋りだす、そこには小さな兎が
ニ匹餌を求めてゐる、金網に押つけた可愛らしい、赤い真珠の
眼、満面な耳などを操つるやうにか、ちやんの手が草の葉を弄ぶ、
「これ、よろ喰べる草だよ、お月さんが水かけてうまうまして呉れ
たんだぞい」
兎は喰べたらしい、サクサクと歯切れの音溢れる。

「もしお月さんが夜になつてもでこなかつたら誰か水をかけてやるの」と訊くと

「お月さんがおなかつたら——おら、そんなこと知んねいわ」顔をあげてバカリと髪の色をふる、岸田さんの「麗子像」を鬼面してならない。

障子を開けてのつそり混沌さんが顔をだす。

「よう——」白ちやけた眼鏡に臆病なそれで善良な笑ひが溶けてゆき、泥に汚れたそつくりの土足袋の抜け出されたところへ太く散つて了う、膝を組んで眠——と一路、ふつくらしに利根煙に流れを覗いた。

「あれっ、一羽ですか、それ」

「——可憐そうですね」

「なかに、時々遠征するから平気だ」鬼はず苦笑すると混沌さんも身体を縮めるやうに笑ふ。

混沌さんが自分で建てた家だ、不恰好な中に懐かしき力か止めもなく鬼じやれる。ニッの片裏の外に紙屋がある、此先まで櫻の樹の下に流れゆく空を仰いでた風を捕ら紙屋の低い北月中を叩いてゐるやうに見へる。

申訳じみた床の間は雑誌と原稿紙と新聞紙と言知れぬ塵とが疲れ切つたポーズを露はしてゐる。化粧のない壁の一隅が破れて竹骨の合間から物置小屋の蔓はげや鬼の居ない箱がちらつく、雨ふると一番困ると混沌さんが言つてたが、「これぢやあ——」と喪失な同感に打たれる。

「おうい」と混純さんが細君を呼ぶ。山から山へ呼びかける自然の重なる声である。たいがいなら混純さんが自分で茶を汲んで呉れるのだが——気持の都合で「おうい」と呼び立てたらしい。細君が野良犬のまま、土間の敷居を上った時、蒼白く掠めた腰をみた。そして土に落げられて凍った肉体への道が恐ろしい。忍耐のマスクを色採り百姓の尊い体験を欺いて暗い。もかけぬ生命を強られて了ふ過程に觸れたが、そういうた慥な感傷を打消し乍ら改めて健康な母胎の息づいてゐる肉体をうしろから覗めた時、もとにのうちやん（かつちやんの弟）のよだれで光ったおとが玉が現はれたので眼を丸くした。

×

混純らしい話——これは説明や描寫よりはほんとに會つて話してみた上の眞実さを愛すからこゝでくどくど書きたくない——が

終つたので二人して外へ出たが心ゆくばかり菊井山の物靜かな空気を教へてらいたつまでもこゝろやつて強んでゐたがうた。

—— 脱稿 ——

☒ よろこひ

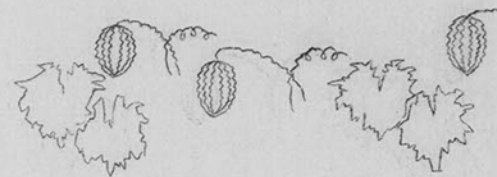
（此の一篇を懐しき人々に捧げ、そして帯状の札とす）

あ、水々今
四年前に別水ん々に逢いぬ
その日水々の嬉しさ、喜び
あ、水々に言葉なく傳ふもなく
瞳、相見しよろこびの
溢れあつたのみ

かつて同郷に住める君等よ！
水々健全なる君等を見し時
晴々せし面を見し時
蒼白とかわらざる心に起へられし時
水々はつらつたる五月の空に燃し

あ、たつかしき人々よ
夜更を知らぬ水々等の言葉
ありし日のおむかひを思ひ
思ひ出してきく人々のこゝろ
あ、瞳は過ぎ
度り果てたる故郷は
次々と呼びかはされ
自然は毎に変わる
人の上に
あ、四年前に別水し君等よ
なつかしき人々よ

（新妻部 不部）



○ 舊作五首

石田修二

常盤路のいく山脈のゆふつきて
をりをり白き雲立ちわたり

ひるながら原中を吹く風さむし

道普請人夫は冬着つけをり

汽車過くる路切りに待つ野子の群
をみなの野子も交りて立てり

柿落葉ふかさを路みつ山なへの

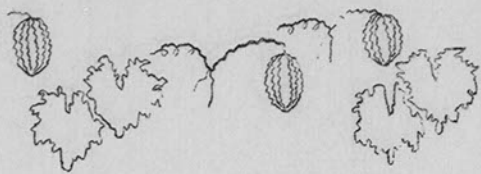
みちゆ清水のあふれ出てけり

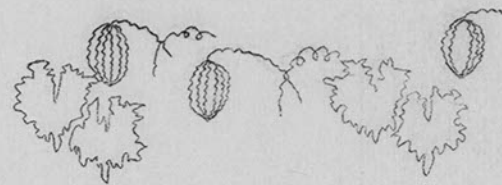
坑内中人昇るらし炭捲きの

車ゆるやかに廻りつゝけり

草よりも弱きけしきとなりけり

雨の哉穀の金沢の浦（晶子）





○ 春から夏

宵路 淡子

あさまたち寝屋の板戸に雨の音

絶へてすかしき陽づらすさめる

夕やけて單衣子供のみがるゝに

外燈下の虫のとびくる

雑興すくい今日も行きにし弟を

むかへに行きつつりかねの花みる



○ 瓶子 其他

佐藤 義家

さつしそら挿すべき花のほと絶へて

素焼瓶子は淋しかりけり

すはらう朝の庭辺に輕草の

露にぬれつゝ陽にし照りはる

土わけてクラジオラスの二葉三葉

伸びてひまなしうらぶる春に

II 蛭 蛸 と 蟻 蛸

佐藤 義 家

これから溫暖になると夕景より朝にかけて多く濕潤の地に宝王を転がすやうな妙音を聞かされること加よくある。コロコロコロと全く曇りのない美麗な音調である。

蛭の音に就いては古くより哀譜悲に相應しいものとして歌或は文章に屢々詠吟されてきたのである。然し乍ら其の何れも加單なる皮相であつて蛭蛸の異性を思慕する切なるものやうに唄れてきた所がそれ加次つて煙意いの甚だしい予断であつた。蛭蛸は決して鳴くべき性質のものではないのである。

こゝに不遇なものとして同情を寄すべきものがある。玲瓏王をころがす声の持主は全く蟻蛸であつた。蛭蛸は蟻蛸も若に濕潤性を好み多く蛭は下水等の近くを好み蟻蛸は田園を生槐家としてゐる。蛭蛸は終始一本調子であつて手も足もない唯腸腑に認識し難い細毛があるばかりでこれに依つて性してもまづ黙永的動物と云ふことが出来る。

X

次に蟻蛸は其形態蟬に類似し一見鳴くべき性質のものだと思ふことが出来る。然し乍ら蟻蛸は蟬に比較して極めて醜なる態形の所有者である。多くは土中を好み慨して外気に觸ること加少ない爲め人々の脳裡からは自然疎外され爲めに永世的な不遇者となつたと思はれる。それについて蛭蛸は散歩の所作或は魚餌として多々接する機会が得るわけである。斯の様にして蛭蛸は人々に近づき路傍の妙声の所有者蟻蛸は疎外され勝な結果蟻蛸の音声はいつとはなしに蛭蛸に冠され次第加俗稱となつたものに思惟される何れにしては蛭蛸の鳴かないと思ふことは確實である。

これから先毒ビミの花が臭白く咲いてゐるとおなごにそれ加曇り目など其の美妙なる音俤を聞くことであらう。

X

X

X



八島冬全

枕曳きや立遣ゆる拾人

せき立つて海を見に行く日今哉

龍道に紅葉の雲肩を打つ

形の灯や櫓の灯や時鳥

蹠蹴って松奥荷の馬の上り行く

○ 拾

佐々木 升 尾

拾着て間もなし女母となる

恙なき身ぞや嬉しの初拾

赤襟ふさはし妻の初拾

初拾四十女のうら若し

拾着て娘は美しくなりまゐる

○ 雅 詠

山の木の色を深めて青嵐

茂り出て開るうす小徑通りけり

真菰川る入江の舟や青嵐

鶯意ふと水なく出てし湯浴客

○ 春から夏

石田修二

雲雀今草をはなる、声の中水
夏に入る頃紫を花に見る
今一つ柳の河岸へ踏に動く
小風さへ葉柳ゆるゝ水輪かな
葉柳の靖水を船歌流るかな
釣はつす散張に動く、朝の風
紫の山繪に見えて青簾
夕立つ筈に濁る野風かな
擔ひ行く夜打の網や月見草

○

佐川満寿々

神垣や杉の若芽に陽の光り
薫風や神の圃垣の杉木立
佐殿まよどの隠家いつこ夏木立
下園や石切の鑿盤に散る火花
もやがる、山懐の若葉かな
風ひとつと吹やらす谷の若葉かな
下園や石切り出す意こぼす
掬ふ手に山吹散るや谷の水
戸にせまる翠微の影や瀧の音

○

剃刀を弟子に委せて歎遣かな

黄昏を見つめつ 櫓の團扇人

月浴びて蚊帳に夜毎を渡する身に

月の露台百合一輪の南咲く

磯は秋葉はたし来て寺領夏の月

○

夜の村を夢に埋めて蛙かな

機織るに山吹ゆるゝ日なりけり

舟圍く河岸ゆくや夏木立

南 彼 白 眠

安 藤 幸 宏

五月雨や羅ぬ水て歸りけり

團扇持つて度になちある官吏かな

○

花桐や小雛格さ立つ庫の前

日除にと植えし泉風の暗さかな

花詰める松に空留米をさきしけり

梅雨明けの街に明るき廣告旗

いたけな是に貝踏む春の海

温泉の欄は花海棠の蔵かな

後蔵るて藤荷岡の喰り哉

織 内 凍 風

馬 場 北 葉



創作 晩 春

横 田 卓 造

まきさんは下町の水道工事の事務所に雇れてから一月はとうに過ぎてゐた。毎日
不慣れた圓圖を書いたり或は現場に出て測量をしたりして其の日を過ごして夕方
消然として、誰も待つ者もない所外水の家に歸つて来るのが常だった。

「酒でも飲ぶかな」

をひ知れぬ淋しさが襲ふてくるとそんなことまで考へた。

「飲めもしないものを無理に飲んで體でも壊しては……」

「飲んでみた處でどうして忘れることが出来ぬ、う」

まきさんには大きな他の廟手があった。それは二月程前に愛する妻が自殺したこ
とであつた。

「俺の妻は死んでしまつたんだ。お互にあんなに愛してゐたら奪れてしまつたんだ」

まきさんの頭の中に偽しい追憶が走馬燈のやうに目まぐるしい程迴轉するのだった。

X

X

X

まきさんは下町に来る前には下碓山で坑内の測量係に務めてゐた。だが不景氣は
寒村の碓山にもやつて来てとうとう会社は事業を投げ出してしまつた。四百人か
らの従業員は皆僅少の旅費と手當とを貰つて、任まされた碓山を後に或は故
郷へ故郷さへも持たないものは仕事を見付けざる爲に、家財を少なう行李や風呂
敷の中に纏めて、本線のひ駈迄峠を越えて毎日のやうに行列が続いた。

まきさんはそれを見たら

「先業看!!」といふ悲惨な感ぜがメスで刺されぬやうに心に響くのだった。

「俺もあの中の一々なんだ。そうして三日すればあの人達と同じやうに行李
や風呂敷包みを背負つて山を越えなければならぬのだ。そんなことを考へ
て見て決して他人事ではないと思ふのだ。」

まきさんはお茶さんといふ若い妻と二人きりで、一語になつて三年以上に
成るか子供を一人も持たなかつた。それ故に常は淋しい生活だった。こうなつて見
ると却つて気軽かも知れなかつた。

下度事務所が休業一同に正式の解散がなされた後、幾くらかの手當金が入った
封書を持つて青ざめた顔に重い足を引ずるやうに帰つた時だった。まきさん
は妻に訴へるやうに或は助カでも乞ふやうにこんな事を言つて見た。

「お京……とうく来る処迄来つちやつたよ、俺達は明日から失業者になつてしまつたんだぞ」

「そうお——却つてい、わ、こんな山の中に一生住まなくともい、かも知れないから」

「ま、さんはお前の言葉外平気な言葉を聞えた時、それに返す言葉も見出せなかつたし又どんな気分であつたのかそれすらも解するのに苦しんだ、そして次に来るものは云ひ知れぬ寂寞と腹立したつた」

「野鹿!! 浮気者! これからどうして食つて行くのだ、お前にそれが分らないのか」

「でも仕方がないわ、腹に考へるだけ損よ、あたし達は遠く悪いんだわ」

「バカッ……野鹿、どこにこんな山の中に居た者を何処に使ふ処があるんだ、野鹿どんなに不景気だか分らないんだ、野鹿から却つてこんな山の中に稼ぎに来らんぢやないか」

「そりやあなたに独断よ、世の中は危ないわ、あたし達二人位何処へ行つたつて食ひるし又世間で食せないぢや置かないわ、威嚇に成つて結構な頼つたり叶つたりだわよ、野へでも行つて働いたら悪く向いて来ないとも限らないわ」

「この大野鹿者!!」

「ま、さんはとうとう爆発して白い手の平が斜めに風を切つた、お京は両手を頬に当て俯伏してす、り泣き下り」

「男のくせに鬼気地なし、昔になつたのかそんなに辛いなら何故お金を溜めて置かざつたの、泣き言を言つたつて就職は落ちて来やしないわ、弱虫!! 鬼気地なし!!」

「なにを鬼気地なし……女のくせに、俺の気持が分かるか」

「もう一つ頬を押さへた手の上へ落ちて行つた、二人とも暫く無音であつた、ま、さんの頭の中にはお前のさふ通り悲観と焦慮との外に何もなかつた。お京は俯伏したまゝ、シヤウリ上げてゐた、ま、さんは説教冷静になつて来ぬにつれて赤く指跡のついた頬を震はしてす、り上げてゐる要が扇々しくなつて来るのであつた」

「弱虫!! なにを考へてゐるの、あたしの言つたことに既に障るならもつと飽きろ返つて頂戴」

「お京! 俺が鬼かつた、なにをいふ程のことではなかつたんだ、あゝ起さて涙をお拭き、もうこうなつてお前のさふ通り仕方がないんだから」

「お京は黙つて顔を上げた、泪は頬一林を濡してゐた、ま、さんはハンカチを出してお前の涙を拭いてやつた、お京は黙つて其の通りになつてゐた」

「四五分も過ぎた頃まだ何処かに泪の影が残つてゐる顔を上げて夫の面を覗くやうにして、お京をうつちやつたわ」と言つたやうに微笑んで見せた、然しま、

んは其の申にもやつぱり言ひ知れぬ頼りないもの淋しさが浮んでゐることを見逃さなかつた。

「お京も俺と同じなんだ」と初めて乳付いたやうに思はれた。其の夜は其のまゝ寝てしまった。平和な眠りだった。

翌朝まさは何時になく早く眼を醒した、そして傍にあるおまの寢床が、枕になつてゐることに気がついた、斯くもしてゐたが起きてゐる気配もしたが、まさんの頭にはビスリツクなおまの泣きか聯想されると同時に不自然な空気の流るのを感ぜた。

おゑ
……
L

口は
静かな
反響
の
み
た
つ
た

「家出し」
そう直感して見たに如直ぐ其の後から「なにを……そんな野鹿
々々しい事かし」主さんは無病療のわうに裏山の方に行つて見た、
な発見と直感に驚愕した。そうして意外

おゝ……お京——
お京も慥かうた、お前はどつして死ぬ程の二とカ

まさんは狂亂したやうに――丁度子供が母親の死骸に取りすがらるやうに
限うなく頰摺りして呼んで見た。然しそれすら無駄な努力だった。
固く結ばれた口と眠つてゐるやうな優し、眼とは永久に解けない謎を遺し
て閉ざされた口から。

土きんには、林の中で誰れにも見て居ないのが幸福だった。死骸の側にはカ
ルモタンの小さい籠が無気味な嘲りを見せてゐた。混乱した土きんは、校死を呼
ぶ服などは持たなかつた。駄目だと知つて直ぐ家の中に抱いてきた。

その際、所の人々は集つてゐた。

7
カ
ル
ミ
タ
ン
自
後
で
す

どうしてそんな物にし
いてこゝろを

「一語にわたる僕にわかなないんです。昨晚はこんなことがあつたんですか……」

かうしてお衆の死は誰の中になつてしまつた。其の翌日白色の大駝し、ことあつて葬式をおしたのには夕立おそくなつてからたつた。

手早く國へ歸つた人々もあつたが、華式には所成に見送つて呉れた人が多かつた。まゝさんはそんなに集つて呉れた人々に封して一人々々にあやまつてやりたひ程感激した。

有難とう！
有難とう！
と心の中に何度も繰返した。

それから五日移過ぎて父葬にしたお女の骨を背負つて往みなれた硫山を後にしたのには朝来ど早い頃だつた。大きな荷物には先にU 敷に急つたので、まきんは一人で残つて居る人々に暇乞ひをしてお断りを立つて行つた。

45

下度峠の頂に上つた頃小さな碓氷の横断場や長座や細長い煙突長く火を渡り鉄索等、まが居なくなつたと云ふやうに音も煙もなくなつてゐるが淋しく思はれた。

「十年も居たあのヤマ、いゝし」

「俺を背にして其の上にあそびを背にしたヤマ、いゝし」

こんなことを考へながら北往なれた処だけに別水が借まれた、峠を下る頃背にした壺の中の骨は歩く度に

「カラ、カラ」と鳴つてまゝを走して生煎入あそびの声を聞くやうに懐しからせた。

「おとなしくしておいでよ、もう故郷に帰るんだから」

小唄にでもふやうに心の中で繰返して暗い気分になりたらずいした。

「妻は死んだ、昔になつて故郷へ行く、俺は此の先どうしたらいいんだらう」

「故郷ではどんなにして迎へて呉れるだらう、錦を着て故郷へ帰る」

——そんな馬鹿々々しいことか——
——虚策——
——虚策——

聯想から聯想、不安から不安へ、

まゝさんは泣きたい気分がひびくについたのは正午に迫つた。

まゝさんはそれ以上意識は出来なかつた。

薄暗い室内は押しつするやうな息で一杯だった、床の間に白布に巻かれた骨壺が寂然としてゐた、花も終つて夏も間近に迫つてゐる晩春の夜息は、まゝさん息外の人々にも可成りに湿つぽい気分を興へてゐるに違ひなかつた。

「俺はもうお前のやうな妻は持つ事は出来なしかる知れない」

それはまゝさんが最後に感じた不女だった。

しんありと夜更の夜気が迫つてゐる室の中でまゝさんは靜かに骨壺を見詰めた。

(完)

後記

- △表現人第二号送り出す。こん度より頁に於ける部数に於ても極限を期した。内容はおまけ得る限り作品を尊重した結果(混雑した駢々しい載せ方をされた爲)創愛せなければならぬ作品もあつた次第です。次号に意載いたします。
- △原稿はどしどし寄せて欲しい。どの同人宛にても可。
- △次号より自由評壇を設ける。批評は理解の完了だ。他を理解し主見をもちた批評を歓迎する。
- △多忙なところ原稿をお寄せ下さい諸兄に謝す。
- △読南車、映画旬報、寄贈多謝!
- △次号原稿×切。六月末日厳守。(卯一郎)

二月一日発行

昭和三年五月廿七日印刷
昭和三年五月一日発行

表現人 第一卷 第二号

編輯同人

石城郡好田町野田 川合 雪雄
石城郡四御村宮 高木 秀
石城郡平町細屋町三六 新妻 育太郎
石城郡平町七軒町 佐藤 義家
石城郡平町北目町一 馬場 卯一郎
馬場 卯一郎

發行所(卯一郎方)

表現人社

杜賣拾銭

品質本位 福山靴店 平田町大通
靴とカバン

新刊書籍雑誌 マルカ書房 平驛前通
ノート文具